

3 時点の連続立面写真から捉える 住民による「まち語り」の特徴と意味

太田 恭平¹・佐々木 葉²

¹学生会員 早稲田大学大学院 創造理工学研究科建設工学専攻
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1) E-mail: kyohei24ot@moegi.waseda.jp

²フェロー会員 早稲田大学教授 創造理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1) E-mail: yoh@waseda.jp

本研究では、自らが暮らすまちについて語ることを「まち語り」と定義し、特に町並みをめぐる「まち語り」の特徴を明らかにすることを目的とする。複数の住民から「まち語り」を引き出す共有媒体として、「3 時点の連続立面写真」を使用したインタビュー実験を行った。得られた語りのコーディングとその分析をもとに、語りのシークエンスを図化することで、その特徴を明らかにした。また、以上を踏まえた上で「まち語り」が持つ意味について考察し、「語られるまち」として地域を考える上で何が求められているのか、「公共性」をキーワードに据えた今後の議論の方向性を示した。

キーワード: 語り, 町並み, 公共性, 連続立面写真, 郡上八幡

1. 序論

(1) 研究の背景と目的

ある地域についての理解を得る手段は様々であるが、実際の土地を散策した上で、風景を知覚した体験する「まち歩き」は、地域の魅力を発見するごく一般的な手段である。一方で、地域に日常的に暮らす人々にとっては、すでに地域の風景は身体化され、無意識のうちに消化されているものと考えられる。「まち歩き」の議論が主に観光学において活発である点からも^{註1}、ある地域への訪問者にとってその土地を歩くことはある種新鮮な体験として効果的である一方で、日常の中に地域が取り込まれている人にとってはそれが難しいと言える。

そこで本研究では、主体にとって身体化された地域を再認識する手段として「まち語り」の概念を提唱したい。

まちづくり分野の諸研究において「語り」は、主に二つの文脈において扱われてきた。一つはオーラルヒストリーなど、地域に暮らす人々の体験に基づく語りから、文献等からは読み取れない情報を得ようとする試みである^{註2}。もう一つは、主体が抱く認識が外部に表出する際の媒体の一種として「語り」を位置づけるものである。主体が風景、あるいは地域に対して抱く認識を捉えようとする試みはすでに様々なアプローチにより行われているが、そもそも認識というものが直接客観的に観察でき

る対象ではないことから、なんらかの媒体をもってそれが顕れる部分を捉える必要がある。その最もわかりやすい例の一つが、主体の発言を読み解くものであろう。例えば、日色ら^{註3}のプロトコル分析を用いた回遊行動に関する研究では、主体の発言から、経路選択時における主体の思考を解釈することを試みている。また尾野ら^{註4}のテキストマイニングを用いた研究では、言語学的概念を基礎としたルールによって、人々によって記憶された経験を構造化する手法を示し、意識的に語られることが少ない都市のイメージを捉えることを試みている。

これらはいずれも聞き手側と話し手側という二者による構図において、聞き手側が話し手側から何らかの情報を得ようとするものである。しかし本研究で言う「まち語り」は、まち歩きと同様に語る本人、すなわち行為者自身が何らかの認識を新規に獲得することを期待するものであり、先に挙げた例とは異なる。

一方で、心理学・社会学を中心としたフィールドで展開されている「ライフヒストリー研究」は、本研究と同様の視座に立っていると言える。やまだ^{註5}によると、従前より文化人類学や社会学で蓄積されてきた「ライフヒストリー研究」が個人史を構成する歴史研究の素材にすぎなかったのに対し、近年「ストーリーの社会学」として興る潮流は「ストーリーを語る行為やストーリーの生産や流通そのものに焦点が当てられて」とされている

る。ここでは「物語」を「2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」と定義した上で、自分自身が知らずのうちに身につけてきた物語を自覚し、語り直すプロセスこそが発達であり、その過程で新たな自己を構築していくとしている。

ここでいう「自己」を、自らが暮らす「まち」に拡大することを考える。仮説的に、「まち」を語ることで、無意識下で身体化してきたまちの空間や建物、自分自身を含めたまちに暮らす人々といった「まち」の構成要素を改めて知覚し、その過程でそれら要素に対する認識を改めて構築していると言えるのではないか。

もう一つ、「語り」について考える上で重要な点として、「独白」と異なりそれに相手が存在するという点が挙げられる。心理学者のブルーナー⁹⁾は、物語は語り手と聞き手の相互作用から生み出されるとした。同時に、「文化」の持つ構成的役割に注目し、人々が「文化」に参加することによって、意味が公共性を持ち、共有されるようになるとしている。これは、語り手と聞き手の相互作用を生み出すため、両者において意味や概念といった共有がなされていることを前提とし、その前提に立つための条件として「文化」への参加を挙げたのであった。これはアレントの言う「世界」の概念に通ずる。アレント¹⁰⁾は、「労働 labor」「仕事 work」に対して人間の排他的特権として「活動 action」を挙げ、それが形成する人間関係の「網の目」を「世界」とした。そして「共通世界」を支えるのは、「立場の相違やそれに伴う多様な遠近法の相違にもかかわらず、すべての人がいつも同一の対象に係わっているという事実」であった。すなわち、「共通世界」の存在が相手を伴う「語り」を許容し、また「語り」を含む他者を必要とする「活動」が「共通世界」を形成していると言える¹¹⁾。

ここで、「まち語り」を「その地域に暮らす人が、ある面的広がりとしての地域と、それを構成するあらゆる要素を含む『まち』について、自分と異なる他者に対し語る行為」と定義する。その上で本研究では、「まち語り」の中でも「町並み」をめぐる語りに注目する。佐々木⁷⁾は、物理的にはその時々ある一つの形をとって存在している建物が、並び、変化しつつ存在している町並みは、「誰でもが眺めることができる」という公開性を有しており、結果として「多次元なパースペクティブによってリアリティを伴って現れ、まちの人たちの間にある共通の世界」としての条件を満たしていると考察している。本研究では、これと同様の立場に立ち、町並みから生じる多様なパースペクティブによる「まち語り」について、複数の被験者間で条件を整えたインタビュー実験を通して分析可能なデータとして取得し、その特徴を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究の方法と構成

本研究では、複数の被験者について町並みから生じる「まち語り」を引き出すための共有媒体として、「3時点の連続立面写真」の使用を試みた。これは岐阜県郡上市八幡町中心市街地における3時点分のファサード写真を用いて作成したもので、佐々木⁷⁾によれば「3時点まちなみ絵巻」と称してすでに住民へ公開した際、様々な語りが発せられたことを確認している。

地域に対する語りを得るために写真や地図、映像といった媒体を用いた研究は過去にも存在する⁹⁾。しかしながら、写真や映像によって示される範囲は画面内に限定され、地域全体において時間的・空間的に一部分になる。また地図は、日常における風景体験と鳥瞰的に示される平面図の間には乖離があり、直覚的にそれらを結びつけるのは難しい。それらの理由から、「ある時点のある場所における記憶」や「特定の対象に向けた評価」、「主体が認知する空間構造」などある特定の情報を引き出すにはそれぞれ有効であっても、多様な対象・時点・視点において、場合によっては実験者が予期しない形で町並みをめぐる語りを展開させ、その特徴自体を捉えようとする本研究の趣旨には合致しない。

本研究は、まず2章で対象地の概要をまとめたのち、3章で実験の概要と、得られた被験者の発言をコーディングし集計した結果を示す。4章では、全体の傾向・言及された場所・被験者の類型化という3つの観点から発言データの分析を行う。以上の分析を踏まえ、5章で語りのシークエンスを図化してその解釈を試みた上で、6章で結論と考察を提示する。

2. 研究対象地の概要

(1) 対象地の概要

岐阜県郡上市八幡町（以下、「郡上八幡」とする）は岐阜県のほぼ中央に位置する町である。そのうち、八幡都市計画区域の面積は約818ha、人口は約8,000人である⁹⁾。郡上踊りや水環境、重伝建地区の指定を受けている伝統的町並みなどを資源としたまちづくりと、それらをもとにした観光産業が発達しており、さらに行政機能や金融機関が集積する市の中心市街地である。

「3時点の連続立面写真」で示す対象範囲は、さらにその中の「新町・今町」と呼ばれる地区とする。当地区は、郡上八幡中心市街地の中でも吉田川を挟んだ南側（通称、「南町」）に位置し、吉田川に沿って東西に市街地を貫く「新町通り」に面した商店街である。1994年に移転されるまで旧八幡町の町役場庁舎が位置したため、公的機関や商店が特に集積し、古くから町の経済活動の中心と認識されている。歴史的な町並みが残る「北町」

に対し、重伝建地区の指定は受けておらず、歴史的な町家と近代的な RC 造の建物が混在するが、家田ら¹⁰⁾によれば、1999年の町並みに関する調査開始以降、景観条例や町民協定の制定も後押しし、より伝統的な意匠、素材や配色へ改修される建物が確認されている。

(2) 対象地の選定理由

上記の通り、新町・今町は郡上八幡の中心商店街であることから多くの住民にとって馴染みがある場所と考えられる。これは「共通世界」としての町並みから生じる多様なパースペクティブによる語りを引き出す際に有効な条件となる。また、現在にかけて町並みの更新が続いており、3時点の連続立面写真において時点間の変化がわかりやすく、さらに建物が密集していることから、空間的連続性も把握しやすい。

以上の理由から、3時点の連続立面写真を用いた際に多くの語りが被験者から得られることが期待されるため、対象地として選定した。

表-1 実験の概要

実験日	2022年11月4日～12月10日
実験場所	岐阜県郡上市八幡町新町939 町家玄麟1階
対象者	郡上八幡の住民・元住民11名(表-2)
手順	① 実験の目的と全体手順を説明する。 ② 3時点の連続立面写真を自由に観察させる。 ③ 観察した上で被験者が思いついた話題を、テーマを限定せずに自由に語らせる。 ④ 話題が尽きたところで、調査者側から予め用意した質問により話題提供を行う。

表-2 被験者の属性

No.	年代	郡上八幡在住 通算年数	UIターン
01	20代男性	2年以下	Iターン
02	40代女性	31～40年	Uターン
03	20代女性	2年以下	Iターン
04	20代男性	21～30年	Uターン
05	40代女性	31～40年	Uターン
06	50代男性	11～20年	*
07	20代女性	2年以下	Iターン
08	20代女性	2年以下	Iターン
09	60代女性	51～60年	Uターン
10	60代男性	61～70年	Uターン
11	40代女性	6～10年	Iターン

*郡上八幡居住歴あり、現在は不定期で滞在

3. 実験方法と結果の集計

(1) 3時点の連続立面写真の作成と実験の実施

新町・今町の建物および空地について、1999年（日本福祉大学佐々木葉研究室撮影）、2010年および2020年（各早稲田大学佐々木葉研究室撮影）の3時点分の写真を用いた。これらの写真を台形補正した上で、通りの北面、南面それぞれについて、実際の建物・空地の配列と一致するように横に連続してつなげ、3時点分の連続立面写真を縦に並べて配置した。作成したデータ(図-1)を、北面、南面について、各縦55cm×横320cmのサイズでカラー印刷した。

これを通りに沿って北面・南面の正面関係が概ね一致するように机上に配置した上で、表-1に示す通りインタビューを伴う実験を行った。被験者の属性を表-2に示す。

(2) インタビューデータの切片化

実験で得られた発話の録音データをテキスト化し、切片化作業をした。切片化の際は、発話が途切れる、または後述する「対象」または「内容」が切り替わるまでを1チャンクとして「発言」とした。このうち、発言自体に意味を有さない相槌等を除外し、全11被験者より1,352件の有効な発言を得た。また、インタビュー全体で被験者が発した発言の集合を、以降「語り」と呼ぶ。

(3) 発言データのコーディング

有効な発言1,352件を、表-3に従って1チャンクに発言の対象と発言の内容(以下、単に「対象」「内容」とする)の組み合わせが1組対応するようにコーディングし、その集計結果を図-2に示す。

対象について、大分類の間で極端な数の偏りはなかった。小分類を見ると、「特定住民・店舗」「特定建物・空地」といった個別のものへの発言が特に多く見られた一方で、「新町・今町全体」といった全体を俯瞰した際の外観や「まち」という概念への言及も見られた。

さらに、内容を大分類ごとに見ると、生活する上で蓄積された知識をもとにした「説明的認識」が最も多く、「印象的認識」「発見的認識」「経験的認識」と続いた。一方、それらを踏まえた上での高次の語りとしての「課題的認識」はほとんど確認できなかった。



図-1 作成した3時点の連続立面写真(北面)

表-3 発言の分類コード一覧

発言の対象による分類コード一覧			発言の内容による分類コード一覧		
A モノ	A1 特定建物・空地	特定の建物・空地への言及	a 発見的認識	a1 現在の状態の発見	現在の状態に対する発見
	A2 不特定建物・空地	不特定の建物・空地への言及		a2 過去の状態の発見	過去の状態に対する発見
	A3 建物の付属物	看板など建物に付随する物への言及		a3 変化の発見	過去から現在にかけての変化に対する発見
	A4 その他モノ	制度、仕組みなど概念を含む、以上に分類されない「モノ」への言及		a4 継続の発見	過去から現在にかけての継続に対する発見
				a5 質問	発見した内容についての実験者への質問
B 空間	B1 新町・今町全体	新町・今町全体（新町のみ、今町のみも含む）への言及	b 経験的認識	b1 現在の経験	現在も継続している経験
	B2 その他地区(郡上八幡内)	郡上八幡内の新町・今町を除く特定地区への言及		b2 過去の経験	過去のある時点での経験
	B3 郡上八幡全体	郡上八幡全体（中心市街地全体、八幡町全体、郡上市全体を含む）への言及	c 説明的認識	c1 現在の状態の説明	現在の状態に対する被験者自身の知識に基づいた説明
	B4 その他地域(郡上八幡外)	郡上市外の特定・不特定地域への言及		c2 過去の状態の説明	過去の状態に対する被験者自身の知識に基づいた説明
C 人・商店	C1 特定住民・店舗個人	特定の住民あるいは店舗(屋号)への言及	d 印象的認識	c3 知識・一般論	被験者自身の知識・一般論
	C2 不特定住民・店舗個人	不特定の住民あるいは店舗への言及		d1 好印象	ポジティブな言葉を伴う印象
	C3 住民全体	郡上八幡の住民全体（特定地区の住民、郡上市の住民を含む）への言及		d2 悪印象	ネガティブな言葉を伴う印象
	C4 訪問者	郡上八幡への外部からの訪問者への言及		d3 単純印象	ポジティブ・ネガティブいずれの言葉も含まない印象
	C5 行政	旧八幡町・郡上市・岐阜県・国への言及		d4 興味	対象への興味関心
	C6 被験者自身	被験者自身への言及		d5 現在の状態の推測	現在の状態に対する「〜であろう」といった推測
	C7 その他人	以上に分類されない人への言及	d6 過去の状態の推測	過去の状態に対する「〜であったらう」といった推測	
D 実験・実験者	この実験そのもの・実験者への言及		e 課題的認識	e1 意思	被験者自らの「〜したい」といった意思
				e2 提案・要望	他者に対する「〜してほしい」「〜した方がよい」といった提案や要望

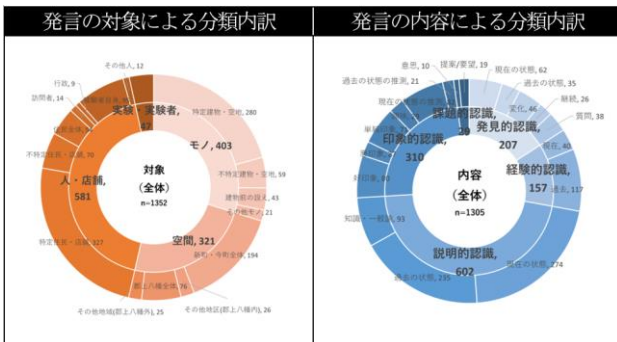


図-2 コーディング結果の集計

4. 発言データの分析

(1) 発言データの全体的傾向

3章で得た有効な発言のうち、対象が「D 実験・実験者」に分類された47件は、そのとき実験が行われていることやその場に実験者が存在することが発言に影響を与えていることが明らかであるため、これらを除外した1,305件の発言データを以降の分析対象とする。このときの、対象と内容の集計結果のマトリクスを表-4に示す。

表-4 対象と内容のマトリクス

内容	対象	対象														
		Aモノ	B空間	C人・商店	D実験者	その他	その他	その他								
a 発見的認識	a1 現在の状態の発見	26	2	1	0	13	0	3	0	11	1	2	0	0	3	0
	a2 過去の状態の発見	21	1	1	3	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0
	a3 変化の発見	22	4	6	0	7	0	0	0	5	2	0	0	0	0	0
	a4 継続の発見	14	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	a5 質問	21	2	0	1	0	0	0	0	0	14	0	0	0	0	0
b 経験的認識	b1 現在の経験	7	4	0	0	12	0	0	0	10	6	1	0	0	0	0
	b2 過去の経験	22	5	4	4	14	0	1	2	55	3	1	5	0	1	0
c 説明的認識	c1 現在の状態の説明	43	9	3	0	33	10	22	8	63	15	14	3	0	50	1
	c2 過去の状態の説明	48	0	17	1	12	7	10	1	100	3	2	0	3	29	2
	c3 知識・一般論	2	9	3	8	8	3	6	9	10	14	16	0	0	2	3
d 印象的認識	d1 好印象	14	2	2	1	19	0	8	0	20	4	9	0	1	0	0
	d2 悪印象	10	4	0	1	3	0	3	0	2	0	0	2	0	2	0
	d3 単純印象	9	3	3	0	22	3	8	2	10	3	4	1	0	0	2
	d4 興味	3	4	2	0	7	0	3	0	5	4	0	0	0	0	1
	d5 現在の状態の推測	10	5	1	1	17	3	9	2	7	14	3	3	2	2	3
	d6 過去の状態の推測	7	1	0	1	7	0	0	1	3	1	0	0	0	0	0
e 課題的認識	e1 意思	1	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	4	1
	e2 提案・要望	0	3	0	0	7	0	3	0	2	0	1	0	3	0	0

*上位10位(12項目)を強調している

表-4から、特に特定住民や店舗に対しての説明や、過去の経験の発言が多く見られることがわかる。特定の建物や空地に対しては、同様に説明や経験が発言されるほか、現在の状態や変化に対しての発見も多い。また、新町・今町全体に対する単純印象も多く見られる。

(2) 言及された場所に注目した分析

(1)と同様の 1,305 件のうち、対象エリア内の特定建物・空地が言及されている発言 506 件に、各建物・空地に固有の場所コード（例：「IS01」）を与え、各地点の出現回数を集計した上で地図上にグラデーションで表示した（図-3）。図より、対象エリア内で幅広い場所が言及されていることがわかる。

上位 5 件は、IS29（飲食店・14 件）、SS03（複合施設・13 件）、SS01（雑貨店・12 件）、SN08（金融機関・11 件）、IS24（飲食店・10 件）であった。IS29、SS03、SS01 の 3 か所はいずれも 2010 年から 2020 年の間

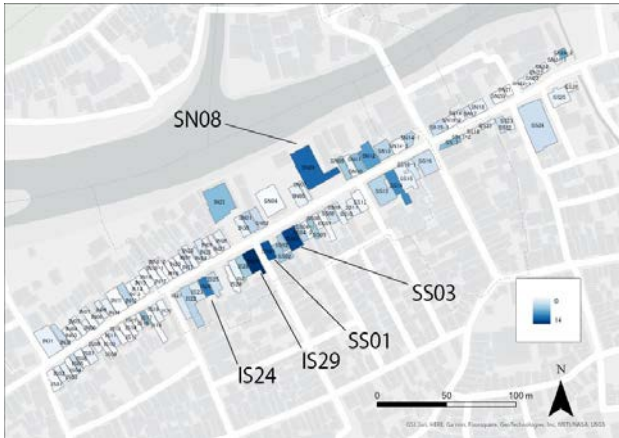


図-3 場所コードの登場回数の地図上表示

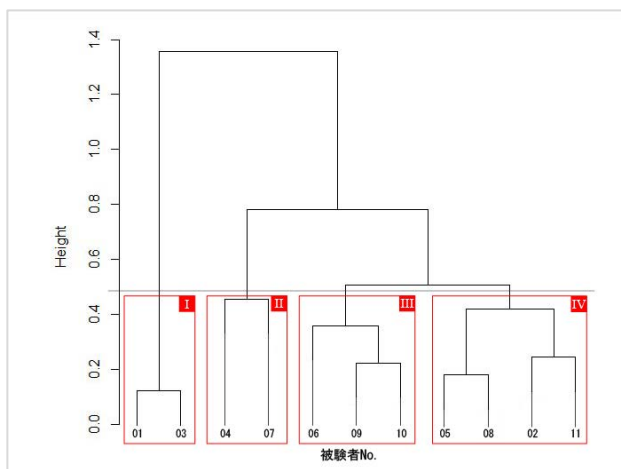


図-4 被験者のクラスター分析結果

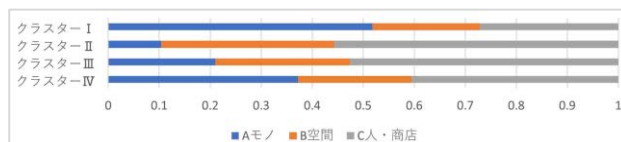


図-5 クラスターごとの対象構成比

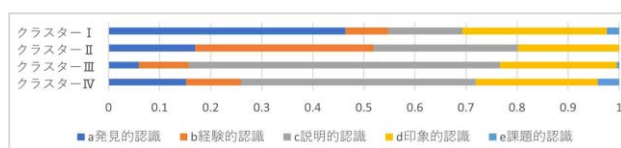


図-6 クラスターごとの内容構成比

に空き家や店舗を改装し新規開店した店舗である。IS24 は老舗飲食店が近年一度閉業し 2022 年に改装の上営業再開した店舗で、SN08 は現在建て替え工事中の金融機関である。いずれも、近年外観や営業形態に大きな変化があった場所であることがわかる。

この 5 件に言及している発言について、内容ごとの件数を見ると、表-3 に示したコードの c2, c1, b2 の順で件数が多かった。いずれの場所も、なんらかの大きな変化により、過去の状態や現在の状態に対する発見、あるいはそこから想起される過去の経験や知識をもとにした説明などの発言が発生しやすくなっていたと考えられる。

(3) 語りによる被験者の類型化

被験者ごとの語りにおける対象・内容の構成比を算出した結果、いずれの割合もある程度のばらつきが見られた。そのため、それらの割合を変数とした階層的クラスター分析によって被験者の類型化を行った。なお、原データの距離はユークリッド距離、データの結合はワード法を用いた。結果、図-4 の通り 11 人の被験者を 4 つのクラスターに分類することができた。各クラスターにおける対象・内容構成比を図-5、図-6 に示した。

各被験者の一連の語りを扱う際、ある発言に関連して、ある発言が新規に発生するというシーケンスを考慮する必要がある。そこで、各発言の対象・内容の組み合わせ（以降「発言タイプ」と呼び、「A1-a1」のように表記する）をノードとして、それがどのような前後関係で接続をしているか、クラスターごとに有向性ネットワーク図を描いて把握する（図-7）。また、各ネットワーク図における媒介中心性が高い、すなわち全体の中でよりハブ的役割を果たしている発言タイプのノード上位 3 項目を、表-5 にまとめた。

a) クラスター I（被験者 01, 03）

モノを対象にした発言、発見的認識が多い。主に建物の外観についての新しい発見や実験者へ問いかける発言が確認された。ネットワーク図における媒介中心性は A1-a2, A1-a5 が高く、個別建物への発見が、他の説明や印象といった語りのベースになっていることがわかる。

両者とも、郡上八幡在住歴が 2 年以下ということから、まちに関する知識が比較的薄く、主に新規の情報をもとに認識を生成していたと示唆される。

表-5 各クラスターにおける媒介中心性上位 3 項目

クラスター I		クラスター II	
対象・内容	媒介中心性	対象・内容	媒介中心性
A1-a2	5.933	C1-b2	10.148
A1-a5	5.728	B1-b2	5.197
A1-a1	4.799	B1-a4	4.779
クラスター III		クラスター IV	
対象・内容	媒介中心性	対象・内容	媒介中心性
C6-c1	11.059	C1-c2	11.882
C1-c1	9.078	C1-c1	10.909
C1-c2	8.511	A1-c2	10.727

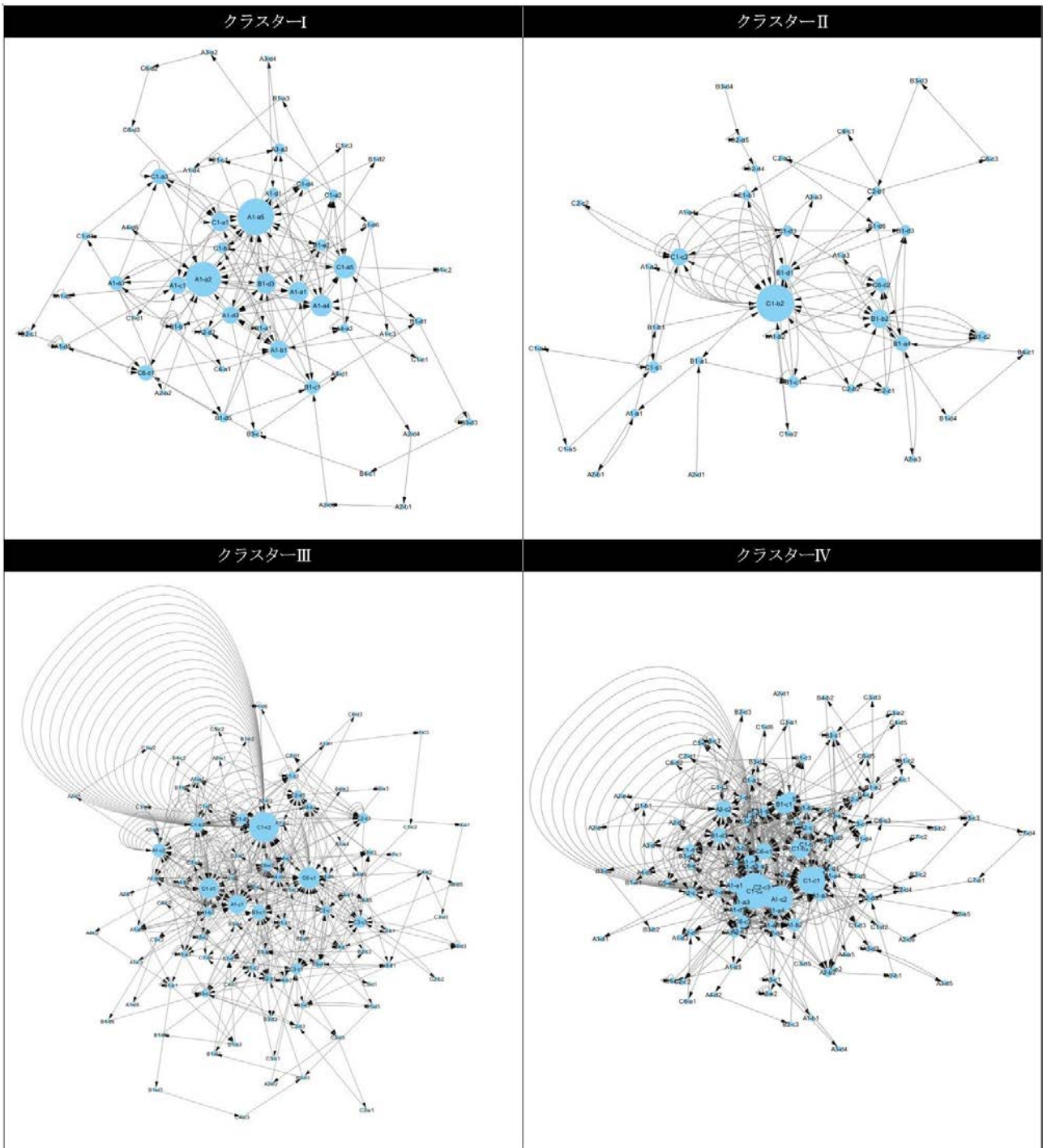


図-7 各クラスターのネットワーク図

b) クラスターII (被験者 04, 07)

人・店舗を対象にした発言割合が最も大きく、経験的認識の割合が目立って大きい。媒介中心性は C1-b2 が大きな値をとっており、個別の店舗や人との間の経験をもとに語りを展開させていく様子が見える。

両者ともに 20 代で、郡上八幡で生まれ育つも一度まちを離れ、近年戻ったという共通点がある。被験者 07 が「子供の時って印象的なお店しか覚えてないですね」と語った通り、幼少期に形成された断片的な経験・記憶をもとにまちへの認識を生成していたと考えられる。

c) クラスターIII (被験者 06, 09, 10)

対象に関しては比較的偏りがないが、発見的認識が少なく説明的認識が極端に大きい。媒介中心性は C6-c1, C1-c1, C1-c2, B3-c1, C3-c1 など大きな値を取った。被験者自身や町内の個別店舗・人、郡上八幡全体に対する説明をもとに語りが展開され、ネットワーク図を見るとそれが回帰される傾向が強い。

3 者ともに 50 代以上であり、郡上八幡在住歴も長い。多くの知識の蓄積をもとに、まちへの認識を生成していたと推測される。

d) クラスタ-Ⅳ (被験者 02, 05, 08, 11)

対象・内容とも割合に大きな偏りはない。一方で、課題的認識が占める割合が他クラスタ-に比べ大きく、実際に被験者 08 を除いて課題的認識の語りが得られている。媒介中心性は C1-c2, C1-cl, A1-c2, B1-cl, C6-cl が大きな値を取っている。これもクラスタ-Ⅲ と同様に、個別店舗・人や個別建物、新町・今町全体への説明をもとに語りが展開されている。

4名中3名が自営業の40代女性で、町内の経済活動における中心世代である。ゆえに知識の蓄積も豊富なほか、他クラスタ-に比べまちの課題にも意識的であり、それらがまちへの認識を生成していたと考えられる。

5. 得られた語りのシーケンスからみた解釈

(1) 語りのシーケンス図の作成

前章を踏まえ、主体が「まち語り」をする際にどのように対象・内容を遷移させるか、また同クラスタ-内の被験者間で共通項を見出せるかを明らかにするため、クラスタ-ごとに「語りのシーケンス図」を作成する。

語りのシーケンス図は、各クラスタ-において媒介中心性が最も高かった発言タイプにあたる発言の前後関係を図化することにより作成する。まず、行に対象、列に内容を置くマトリクスを作成し、そのクラスタ-において媒介中心性が最も高かった発言タイプにあたる発言を全て該当するセル内に配置する。次に、配置した発言の前後にあたる発言を、話題が大きく転換するところまでマトリクス内の該当セルに配置し、前後関係に従って矢印で接続する。最後に、各クラスタ-において媒介中心性が高い発言タイプ上位3項目の発言をグレー地の枠で囲む。以上のように作成したものを図-8~11に示す。

(2) 語りのシーケンス図の解釈

作成した図から、以下の解釈を試みた。

a) 創発的プロセスによって生成される発言

シーケンス図全体を俯瞰して見ると、それぞれのクラスタ-においてある発言タイプの発言が、特定の発言タイプの発言につながるといった定型的なつながりが見られる部分がありつつも、多くは不定形に発言がつながっている様子がわかる。つまり、予め規定された型に従って予定調和的に発言が生成されているのではなく、あくまでその時々で創発的なプロセスを経て生成されているということができる。

b) 語りの中でハブとなる発言タイプ

前章の分析において、語り全体の中でハブ的役割を果たしている発言タイプの存在は明らかにされた。ここで改めて図を描くことで、そのような発言の前後に異なる

発言タイプの発言が存在することが明確になった。換言すると、異なる発言タイプの発言から生成されやすく、また同時に異なる発言タイプの発言を生成しやすい発言タイプがクラスタ-ごとに存在するというのである。

これと a) を踏まえると、各クラスタ-に存在する「ハブとなる発言タイプ」は、創発性を触発するような発言タイプであると考えられる。さらに、クラスタ-によってそのような発言タイプは異なるということが言える。

c) 発言の対象の拡大・縮小／内容の具体化・抽象化

ある発言タイプの発言が、異なる発言タイプの発言につながっている様子に注目すると、発言が連続する中で対象の空間的拡大・縮小、あるいは内容の具体化・抽象化という動作を伴っていることがわかる。

ここでも a) での解釈を踏まえると、創発的プロセスの中で対象を空間的に拡大・縮小させたり、内容を具体化・抽象化させたりしている。つまり、「ある建物の設えがある建物の附属物で、その建物がある街区に属し、さらにその街区が大きな町全体の一部に位置するものである」ということ、あるいは「自身の発見や経験が根拠となり他者への説明や自身が抱く印象、また今後の課題などが生じる」というように、主体が対象や内容を連続的に関係づけながら認識していると解釈できる。こうした関係性のもとにある様々な記憶や思いがその都度自由に選択されることで、予定調和ではない創発的プロセスとしての語りが生まれていると考えられる。

6. 結論と考察

(1) 本研究で得られた結論

まず、3時点の連続立面写真を用いて「まち語り」の発話を取得し、切片化とコーディングを行った(3章)。

個々の発言の対象と内容によるコーディング結果から、語りの全体的な傾向を把握した(4章(1))。また語りの中で言及される場所は限定されず広がりがあるが、その中でも多く言及される場所には、近年なんらかの大きな変化が起こっているという共通点があった(4章(2))。さらに、発言の対象や内容の構成比は、主体ごとに多様である一方でいくつかの類型に分けることができ、語りの展開においてハブとなるような発言タイプが主体の類型ごとに存在することがわかった(4章(3))。

これらをもとに作成した語りのシーケンス図より、a) 発言は予定調和的でなく、創発的なプロセスを経て生成されていること、b) クラスタ-ごとに創発性を触発するような、語りのハブになっている発言タイプがあること、c) 主体は語る対象や内容の連続性を認識しながら、対象の空間的な拡大・縮小や内容の具体化・抽象化を伴い発言を生成していることの3点が解釈できた(5章)。

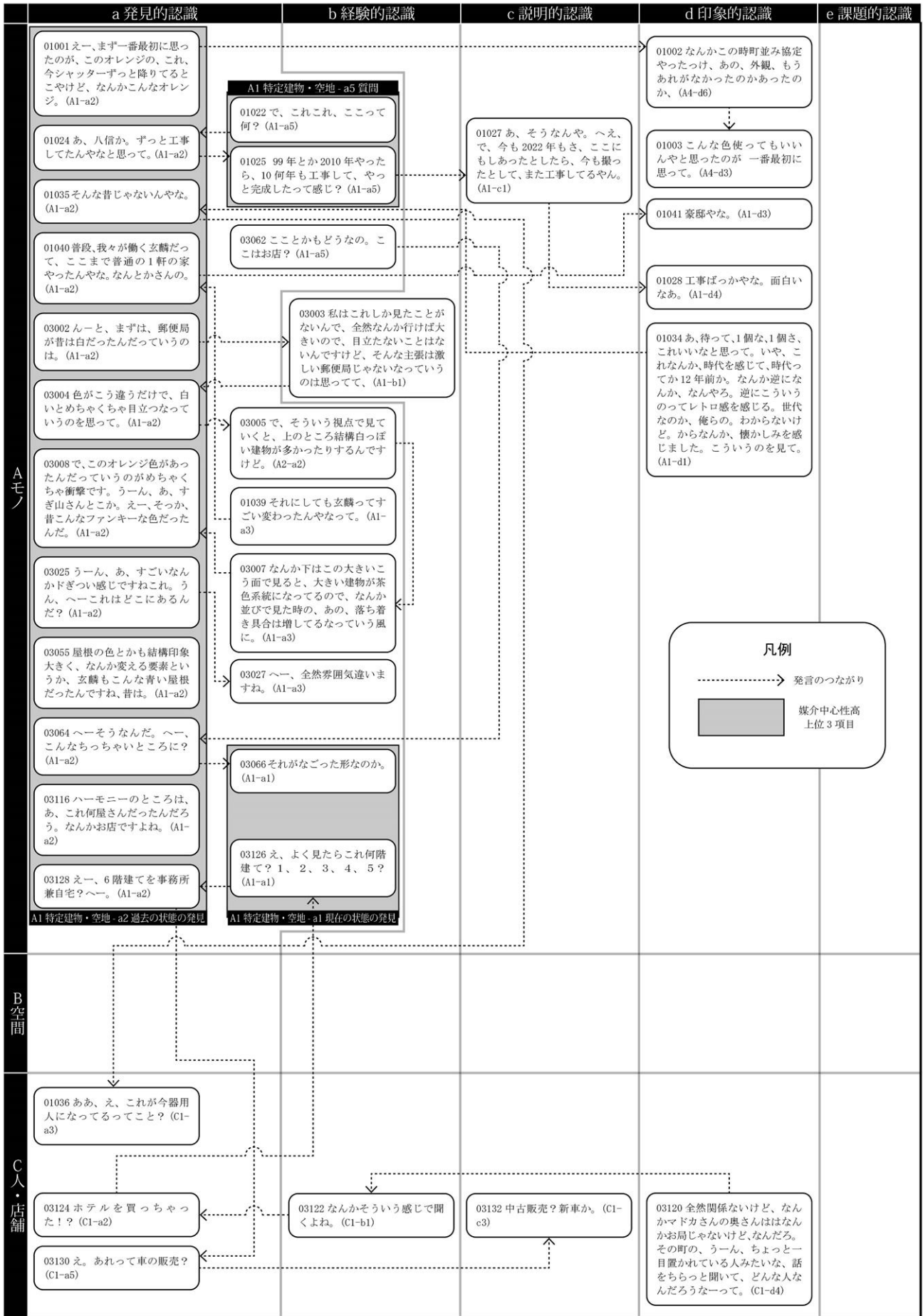


図-8 クラスタ-1の語りのシーケンス図

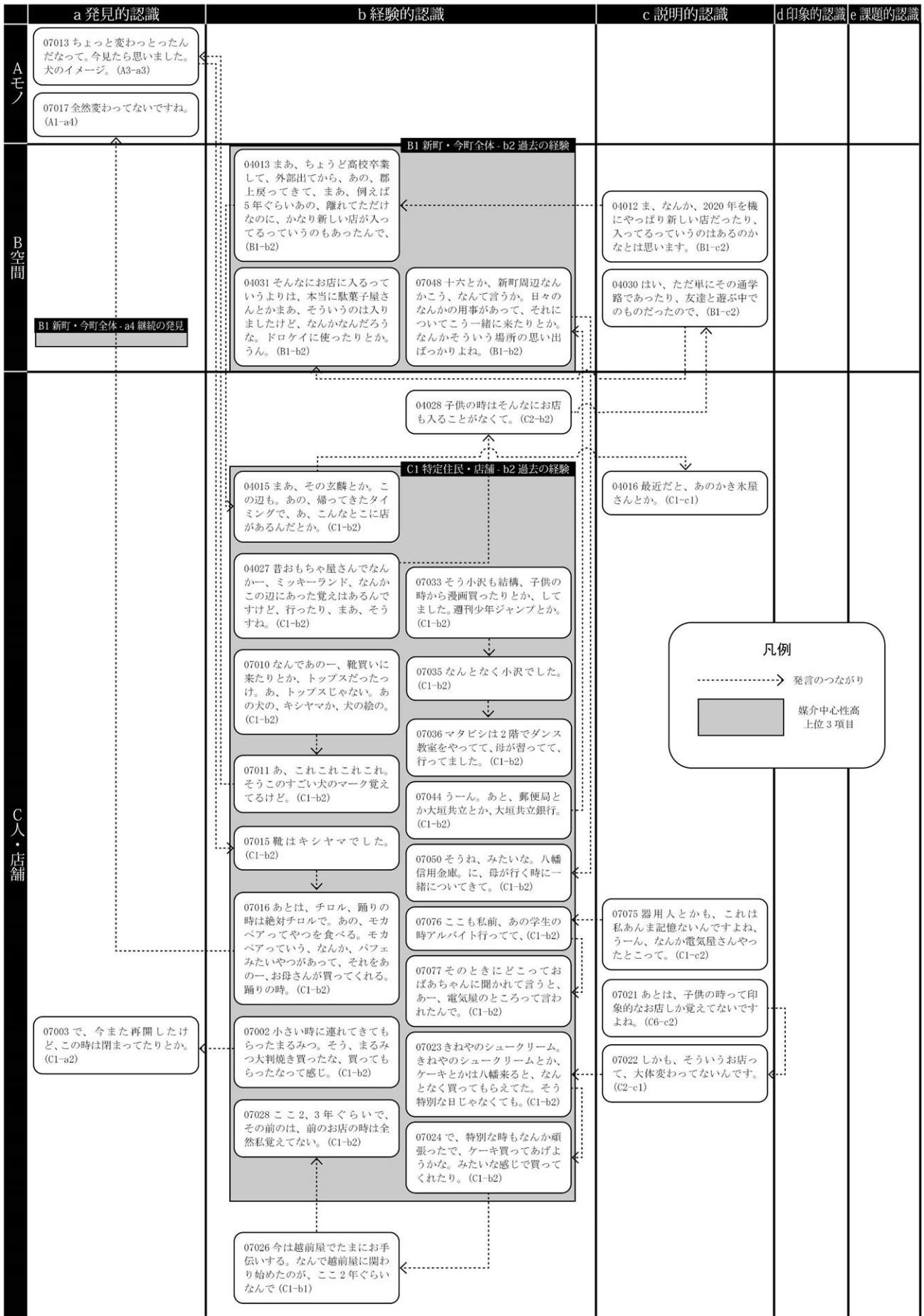


図-9 クラスターIIの語りのシーケンス図

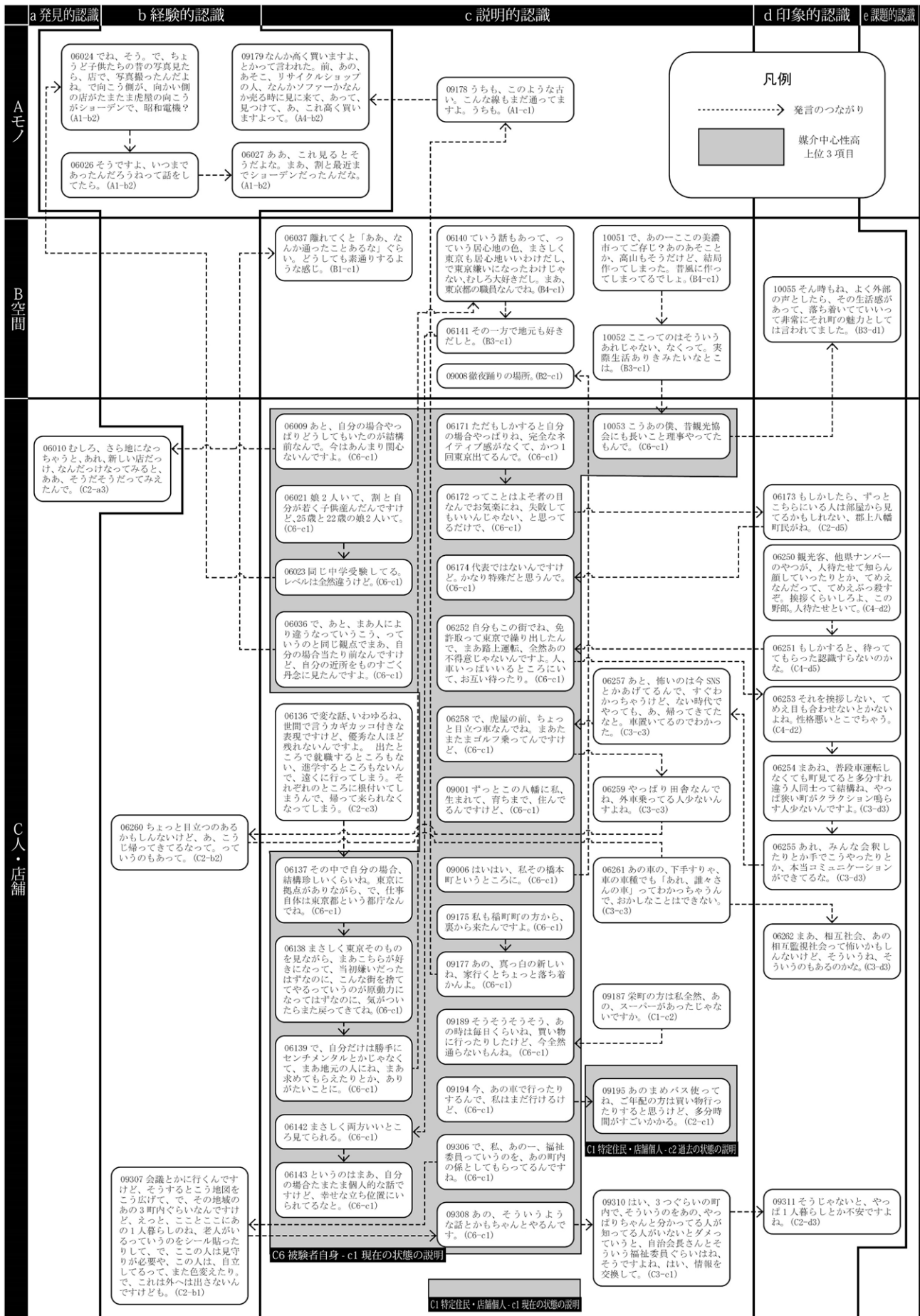


図-10 クラスターⅢの語りのシーケンス図

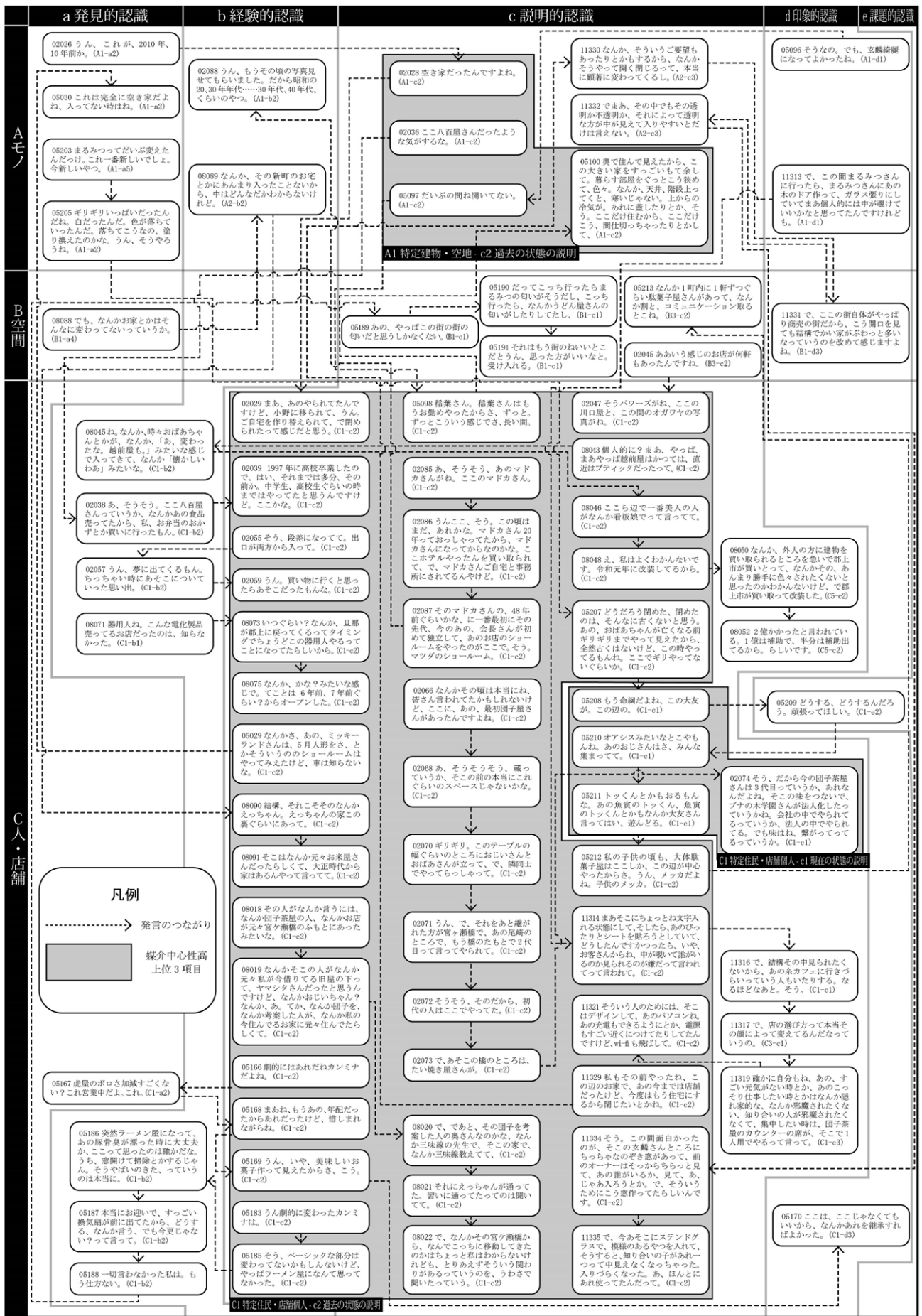


図-11 クラスタIVの語りのシーケンス図

(2) 「まち語り」という行為の意味

本研究から得られた結論、特に5章における3つの解釈から、まず町並みをめぐる「まち語り」の特徴についてまとめる。まずa)より、創発的プロセスによって発言が生成されていく様子は、既に意識化されている典型的なイメージから離れ、無意識下に獲得したあらゆる情報を整理する過程で、改めて言及の対象を知覚し、新たな認識を生み出していると言える。またb)c)より、11人の被験者は同一の「新町・今町」の町並みに対し、属性に応じ傾向の見られる異なった視点・立場を持ちながら、一主体内でも多様なパースペクティブを伴い「まち語り」がなされていることがわかる。

以上と1章での議論を踏まえると、少なくとも町並みをめぐる「まち語り」について、その過程において主体が「まち」の構成要素を改めて知覚し、それら要素に対する新たな認識を構築しているということ、さらにそれはまちの人びとにとっての「共通世界」を維持する働きそのものであるということが言える。これらから「まち語り」について、主体にとって身体化された地域を再認識する機会、また「共通世界」を基盤とするコミュニティを維持・醸成する手段としての有効性が示唆された。

(3) 「語られるまち」の要件

本研究の実験において、「まち語り」が成立した、すなわち語り手（被験者）と聞き手（実験者）の相互作用が実現したのは、まず互いに日本語という言語を共有し、少なくとも日本における一般的な社会的文脈を共有していたからであることは疑う余地がない。加えて、聞き手に語る町並みやそこから生じる対象などは、他者と共有可能で開かれており、公共性を獲得していたとも解釈できる。ある被験者から、録画・録音されている状態では話にくい内容がある、という旨の発言を得たが、その方は言葉を選びながら、公開性のある対象についてそこから連想される内容を語ったものと思われる。したがってそこには「共通世界」としての町並みが存在しており、町並みから生じる「まち語り」の可能性を担保していたと考えることができる。

景観法策定以来、町並み保全の重要性が様々な場面で説かれてきたが、本研究の結論から示唆される保全すべき町並みとは、それが有する「公共性」によってまちの人びとにとっての「まち語り」の可能性が担保され、さらにその「まち語り」によって人びとにとっての「共通世界」が維持される、持続的な循環構造を得るような町並みではないか。さらにこの議論を「都市の景観そのものの眺め」である町並みから拡張させ、都市・農村問わず、コミュニティが存在するあらゆる場所における風景について考えたとき、同様のことが言える可能性は十分にあり得るのではないか。

謝辞：郡上八幡にお住まいの11名の方々にはインタビュー実験にご協力いただいた。また（一社）郡上八幡まちづくり会議の武藤隆晴氏には現地での調査活動をサポートいただいた。ここに厚く感謝の意を表す。

補注

- 注1) まち歩きが持つ根源的な意味に着目した研究は、景観・デザインの分野では高浜ら¹¹⁾の研究などが挙げられる。他にも、「回遊行動」などのキーワードで行為そのものの実態把握を試みた研究は都市計画の分野では数多く見られる¹²⁾も、いずれもその行為の主体にとっての意味あるいは効果にアプローチしたものではない。観光学における「まち歩き」の議論についてここでは詳しく扱わないが、例えば太田¹³⁾の研究などが挙げられる。
- 注2) この循環構造は、アレントの「活動的生活」についての主張にも表れている。曰く、「物と人とは、それぞれの人間の活動力の環境を形成しており、このような場所がなければ人間の活動力は無意味である。とはいえ、この環境、私たちがそこに生まれてくるこの世界は、（中略）人間の活動力なしには存在しないだろう⁶⁾」。

参考文献

- 1) 例えば、後藤春彦、佐久間康富、田口太郎：まちづくりオーラル・ヒストリー―「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く、水曜社、2005。
- 2) 日色真帆、原広司、門内輝行：迷いと発見を含んだ問題解決としての都市空間経路探索：日本建築学会論文集、No.466、pp.65-74、1994。
- 3) 尾野薫、星野裕司、増山晃太：都市空間において記憶された経験を捉えるための一試論、土木学会論文集D1（景観・デザイン）、Vol.71、No.1、pp.133-150、2015。
- 4) やまだようこ編著：人生を物語る―生成のライフヒストリー、ミネルヴァ書房、2000。
- 5) J・ブルーナー著、岡本夏木、中渡一美、吉村啓子訳：意味の復権―フォークサイコロジーに向けて、ミネルヴァ書房、1999。
- 6) ハンナ・アレント著、志水速雄訳：人間の条件、筑摩書房、1994。
- 7) 佐々木葉：まちにいる・まちにひらく郡上八幡 sacco lab.の120日、景観・デザイン研究講演集、No.18、pp.350-357、2022。
- 8) 例えば、窪田垂矢：水郷の商都・佐原における「記憶の枠組み」についての研究―「歴史的なもの」との関係性をふまえた考察―、日本建築学会計画系論文集、第79巻、第705号、pp.2443-2452、2014。
- 9) 郡上市：八幡都市計画マスタープラン（第2期）、2021。
- 10) 家田雅之、佐々木葉、舛場星澄：郡上八幡における町並みを構成するファサードの特徴と変化、景観・デザイン研究講演集、No.17、pp.324-329、2021。
- 11) 高浜康巨、福井恒明：行動と意味から見た街歩き体験の分析、景観・デザイン研究講演集、No.7、pp.98-108、2011。
- 12) 例えば、高橋弘明、後藤春彦、佐久間康富、齊藤亮、石井武：商業集積地における来訪者の回遊行動と店舗密度の関係についての研究―下北沢駅周辺地域を事例として、都市計画論文集、No.40-3、pp.649-654、2005。
- 13) 太田均：日本におけるまち歩き事業の系譜・類型と比較、日本国際観光学会論文集、No.26、pp.199-207、2019。